

#### ④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第 28 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会（保 18）	保存科学部	85
国際文化財保存修復研究会の実施（セ 11）	国際文化財保存修復 協力センター	86
美術部オープンレクチャー（美 13）	美術部	87
芸能部公開学術講座（芸 06）	芸能部	88
芸能部夏期学術講座（芸 06）	芸能部	88
民俗芸能研究協議会（芸 13）	芸能部	89
文化財保存修復研究協議会（セ 31）	国際文化財保存修復 協力センター	90
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修 01）	修復技術部	90
在外日本古美術品調査報告会（*修 05）	修復技術部	91
総合研究会（情）	協力調整官 —情報調整室	92
美術部研究会（美）	美術部	92
保存科学部研究会（保）	保存科学部	93
各国の文化財保護制度に関する研究会（セ）	国際文化財保存修復 協力センター	95

- \*注 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①修 01）の一環として実施した。
- ・在外日本古美術品調査報告会は、在外日本古美術品保存修復協力事業（②修 05）の中で包括的に実施した。

**第28回文化財の保存・修復に関する国際研究集会**  
**「文化財の非破壊調査法—X線分析の最前線—」** (④保 18-04-1/1)

第28回国際研究集会は、保存科学部の担当で行われた。近年、文化財の科学的調査に関する研究は大きく進展し、ここ5～10年ほどの間に可搬型蛍光X線分析装置をはじめ様々な機器が開発され、美術史的・歴史的な新知見も数多く得られるようになってきた。こうした状況を踏まえ、今回の研究集会では、この分野の第一線で活躍する研究者（海外7名、国内11名）の講演を企画した。特に、海外からの研究者による発表では、非破壊分析に関する各国の考え方、あるいは可搬型X線分析に関する最新の取り組みなどが報告され、総合討議でもこれらの点に関して大変有意義な議論が交わされた。

期間：2004（平成16）年12月1～3日、場所：東京都美術館講堂

基調講演 X線による文化財の組成分析

ミカエル・マントラー ウィーン工科大学

基調講演 美術史学と最新の科学的方法による調査研究

有賀祥隆 東京芸術大学

<セッション1：X線による非破壊調査>

機器の小型化と微小資料分析—カナダ文化財保存研究所におけるX線分析

マリー・クロード・コーベイル カナダ保存科学部研究所

瓦用鉄釘の材質と再利用

平井昭司 武蔵工業大学

文化財資料の化学組成と蛍光X線分析法を用いた文化財資料の非破壊調査

平尾良光 別府大学

韓国における電子顕微鏡および蛍光X線分析の利用

金奎虎 国立公州大学校

<セッション2：文化財資料のその場分析>

蛍光X線によるデロス博物館所蔵ヘレニズム彫刻彩色のその場分析

アンドレアス・カリダス ギリシャ原子核物理研究所

ポータブル蛍光X線分析と粉末回折による中東の発掘サイトにおける考古遺物の分析

中井 泉 東京理科大学

文化財の非破壊分析のための蛍光X線分析装置—機器、方法、ソフトウェアの開発

ホセ・ロレンツォ・フェレーロ バレンシア大学

高松塚古墳壁画の蛍光X線分析

早川泰弘 東京文化財研究所

高松塚古墳壁画の画像形成

城野誠治 東京文化財研究所

可搬型蛍光X線分析装置を用いた女乗物の調査事例

日高真吾 国立民族学博物館

可搬型蛍光X線分析装置による国立台湾博物館所蔵絵画の顔料分析

鄭 明水 台湾文化資産保存研究中心

<セッション3：各種文化財の非破壊調査>

文化財材料に及ぼす大気環境の影響に関する研究—文化財のX線分析による非破壊調査の視点から—

二宮修治 東京学芸大学

敦煌の壁画分析に関する問題点

蘇 伯民 敦煌保存研究院

日本の浮世絵版画に見られる青色着色料の非破壊分析

下山 進 吉備国際大学

考古遺物資料の非破壊分析—レーザー・ラマン分光法—

高妻 洋成 奈良文化財研究所

紫外・可視分光法による染料分析の可能性

吉田直人 東京文化財研究所

### 国際文化財保存修復研究会 (④セ 11-04-4/5)

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人びとの接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる国や地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、年2回、国際文化財保存修復研究会を開催し、専門家による報告を通して、具体的な海外での保存事業における技術的な問題から運営面、財政面の問題、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる情報交換の場を提供している。

#### 第16回国際文化財保存修復研究会

テーマ：“文化的景観”の意義—その保全、管理、今後の課題

趣旨：2004（平成16）年春の国会において文化財保護法が改正され、文化財保護の枠組みにあらたに“文化的景観”が取り入れられることになったのを承け、“文化的景観”とはそもそもどのようなものか、導入された経緯、そしてその意義、今後の課題について、情報を交換し、議論を行いたいという趣旨から、研究会を開催した。

日時：2004（平成16）年9月22日（水）10:00～17:30

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：126人

講演：

「文化財保護法における“文化的景観”導入の意味と今後の展望」（文化庁 本中眞）

「国際的に見る“文化的景観”保護の動向」（東京文化財研究所 稲葉信子）

「景観法について」（国土交通省 榎野良明）

「文化的景観の保全、管理—その技術的課題」（文化財保存計画協会 矢野和之）

「環境歴史学と文化的景観」（別府大学 飯沼賢司）

「中国における“文化的景観”の動向と日本の取組みへの期待」（ユネスコ北京事務所 杜曉帆）

#### 第17回国際文化財保存修復研究会

テーマ：中国石窟寺院の保存修復—その現状と課題—

趣旨：敦煌莫高窟や洛陽龍門石窟など、日本と中国の国際協力による文化財保存修復活動の中でも、仏教文化を代表する石窟寺院は重要な位置を占めているが、永年にわたる協力関係は、時間の経過とともに技術的課題、経費、協力事業の枠組みに変化が生まれ、また双方の世代交代が進むなど、いま様々な変革点に立っている。このような認識のもと、中国石窟寺院の保護修復に関する研究会を実施した。

日時：2005（平成17）年3月18日（金）10:00～17:30

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：103人

講演：

「中国石窟寺院の文化的価値と保護の意味」（東京文化財研究所 岡田健）

「中国における石窟寺院の保存修復について」（中国文物研究所 黄克忠）

「敦煌石窟保護の現状と課題」（敦煌研究院保護所 蘇伯民）

「陝西彬県大仏寺の保存修復事業について」（西安文物保護修復センター 馬濤）

「ユネスコの中国石窟寺院保護事業について」（ユネスコ北京事務所 杜曉帆）

**第 38 回美術部オープンレクチャー**  
**「日本における外来美術の受容」(④美 13-04-4/5)**

美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しており、本年度で 38 回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2 日連続で開講し、聴講者の便宜を図るよう努めた。昨年に引きつづき、美術部の研究プロジェクトである「日本における外来美術の受容」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下のとおりである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開かれる「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は、2 日間でのべ 261 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、180 人から回答を得た（回収率 69%）。結果は、「たいへん満足した」96 人（53.3%）、「おおむね満足した」60 人（33.3%）、「不満が残った」3 人（1.7%）、無回答 21 人（11.7%）を数え、回答者の 86.6%が満足感を得たことがわかった。

第 1 日：2004（平成 16）年 11 月 5 日（金）午後 1：30 分～4：00 東京文化財研究所・地階セミナー室  
 ◇臺信祐爾（九州国立博物館〔仮称〕設立準備室文化財主幹）「大谷光瑞と仏教の流伝調査」

西本願寺第二十二世門主大谷光瑞（1876-1948）は、若くしてヨーロッパで近代国家と宗教の関係を学んだ。19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、ロシア、イギリスなどの探検隊は、中央アジア（西域）探検で大成果を挙げた。親しくその成果を目の当たりにした光瑞は、西域のほか、スリランカ、インド、パキスタンの仏跡、東南アジアから雲南・四川、さらにはチベットに、仏教東漸のあとを確かめるべく調査隊を派遣した。光瑞その人、および探検の内容と成果について紹介した。

◇中野照男（美術部長）「若き美術史研究者の夢―尾高鮮之助の旅と仕事―」

尾高鮮之助（1901-1933）は、東京文化財研究所の前身である美術研究所の開所の頃に活躍した研究者である。当初浮世絵研究を志していた彼は、研究所の矢代幸雄や和田新に刺激されて、東西文化交流の研究、日本美術の源流の探索へと関心を広げていった。1930（昭和 5）年の朝鮮、満州旅行、昭和 6～7 年の東南アジア、インド、パキスタン、アフガニスタンなどの旅行を通じて、彼がどのような研究の構想をいただいたかを検証した。

第 2 日：2004（平成 16）年 11 月 6 日（土）午後 1：30 分～4：00 東京文化財研究所・地階セミナー室  
 ◇小山ブリジット（武蔵大学教授）「黒田清輝と世紀末のパリー―西洋人からの書簡を通して―」

1884（明治 17）年 3 月、黒田清輝は芸術の都パリに到着した。彼が長年憧れていたその当時のパリはどのような街だったのか、また、黒田はどのような所に住んで勉強していたのかなどについて説明した。1894（明治 27）年に帰国するまで、様々な人々と出会った黒田がどのような生活を送っていたかについても述べた。東京文化財研究所に保管されている貴重な黒田清輝宛書簡を通して、黒田がどのような人たちと付き合っていたかについて発表した。

◇田中淳（黒田記念近代現代美術研究室長）「明治 30 年の黒田清輝」

1893（明治 26）年に、9 年に及ぶフランス留学をおえて帰国した黒田清輝（1866-1924）。彼は、帰国後の数年間に画家としてもっとも充実した生活を送った。そこで、これまで語られることのなかった画家の暮らしの面から、《湖畔》が制作された 1897（明治 30）年前後を中心に、その創作活動と実像をみなおした。同時に、黒田記念館で所蔵するこの時期の作品の光学的手法による調査によって得られた最新の研究成果もあわせて報告した。

第 35 回芸能部公開学術講座「鹿島踊の諸相」(④芸 06-04-4/5)

日 時：2004（平成 16）年 12 月 26 日（土）

場 所：江戸東京博物館ホール

入場者数：398 名

今年度の公開学術講座は、昨年度の研究プロジェクト「民俗芸能の上演目的や上演場所の調査研究」における成果を反映させて、民俗芸能として各地に残る鹿島踊・弥勒踊と、歌舞伎舞踊・長唄の曲として残されている鹿島踊を講演と実演を通して比較し考察した。波左間のみのおどりは地元以外での上演は初めてであり、歌舞伎舞踊の「俄かしま踊」も現在では上演されることの稀な演目であり、貴重な演目の公開という面での意義も大きかった。

プログラム

講演 「各地の鹿島踊・弥勒踊とその特色」	俵木悟（芸能部民俗芸能研究室）
実演Ⅰ 「波左間のみのおどり」	波左間諏訪神社みのおどりの会（千葉県館山市）
実演Ⅱ 舞踊・長唄「俄かしま踊」	舞踊：坂東鼓登治
長唄「月の巻」より鹿島踊	唄：稀音家義丸、杵屋勝彦
	三味線：稀音家助三朗、稀音家六公郎
	囃子：望月庸子、鈴木秀幸
鼎談 「歌舞伎舞踊における鹿島踊とその周辺」	坂東鼓登治、稀音家義丸、杵屋勝彦
	聞き手：飯島満（芸能部主任研究官）

芸能部夏期学術講座 (④芸 06-04-4/5)

第 29 回夏期学術講座「人形浄瑠璃の変遷—演出を主として—」

日 時：2004（平成 16）年 7 月 12 日（月）～14 日（水）

(1) 10:30～12:30、(2) 13:15～14:45、(3) 15:00～16:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：33 名

担当講師：鎌倉恵子（演劇研究室長）、飯島満（主任研究官）、児玉竜一（協力研究員・日本女子大学助教授）

テーマ：「人形浄瑠璃の変遷—演出を主として—」

趣 旨：人形浄瑠璃（文楽）は、近世に誕生して以来、内容・演出面にさまざまな変化を見せながら今日に至っている。これまでは、文字資料中心の古典文学研究として扱われることの多かった人形浄瑠璃について、その演出面に注目し、あまり取り上げられなかった裏方の事情も視野に入れながら、その歩みをたどる。そしてユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作」に宣言された人形浄瑠璃が現在抱えている問題点について考察し、将来について検討する。

プログラム

第 1 日	13:15～14:45	近世の演出
	15:00～16:30	人形と首 1
第 2 日	10:30～12:30	人形と首 2
	13:15～14:45	鬘
	15:00～16:30	浄瑠璃から歌舞伎へ
第 3 日	10:30～12:30	語りの変化と音声資料
	13:15～14:45	課題と展望
	15:00～16:30	質疑

## 民俗芸能研究協議会 (④芸 13-04-4/5)

第7回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の公開をめぐる」

日 時：2004（平成16）年11月18日（木）10:30～17:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：96名

テ ー マ：民俗芸能の公開をめぐる

趣 旨：芸能部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して民俗芸能の保護と継承について研究協議する会を開催しており、本年は第7回である。文化財としての民俗芸能については、保存と並んでその積極的な活用が求められており、多くの人々に見る機会を提供することは、無形の民俗文化財としての民俗芸能の活用の重要な手法の一つである。一方で民俗芸能の多くは、民俗的背景と切り離しては意義が損なわれるものであり、現地の祭礼等での上演以外の公開については批判的な意見も存在する。しかしすでに現在、多様な企画意図をもった民俗芸能の公演の機会が存在し、社会的な認知を受けている。また民俗芸能の保護団体側でも、こうした公開の機会を自分たちの伝承活動に活かし、伝承の活性化を図る例も見られる。今回の協議会では、このような状況を前提とし、文化財としての民俗芸能の保護とその活性化の両面を視野に入れ、4名の報告者による事例発表とコメントーターを交えた総合討議を実施して、よりよい公開事業を行うための協議を行い、その結果を報告書として刊行した。

プログラム：

10:30～10:40	挨拶	東京文化財研究所長	鈴木 規夫
10:40～11:25	「民俗芸能大会をめぐる今日的状況」	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室長	宮田 繁幸
11:25～12:10	「全日本郷土芸能協会の公開事業—全国子ども民俗芸能大会を中心として—」	社団法人全日本郷土芸能協会専務理事	城井 智子
12:10～13:30	(昼食)		
13:30～14:15	『北上みちのく芸能まつり』の企画について	北上みちのく芸能まつり運営委員	加藤 俊夫
14:15～15:00	『郷土舞踊と民謡の会』から『全国民俗芸能大会』へ	民俗芸能学会代表理事	山路 興造
15:00～15:20	(休憩)		
15:20～17:20	総合討議		
	コメントーター	國學院大学日本文化研究所助教授	茂木 栄
		東京文化財研究所名誉研究員	星野 紘
	コーディネーター	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室長	宮田 繁幸
	総司会	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室	俵木 悟

また、平成14年度に開催した第5回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の映像記録作成」の協議を引き継ぐかたちで、「民俗芸能の映像記録作成」小協議会を昨年度より継続して開催している。平成16年度は2回の協議を行った。

第4回：2004（平成16）年6月4日（金）参加者15名

第5回：2004（平成16）年9月17日（金）参加者13名

## 第 34 回文化財保存修復研究協議会 (④セ 31-04-1/1)

### 目 的

この研究協議会では、保存調査手法や修復技術など保存と修復に関わる今日的テーマについて、外部に広く知ってもらうために発表および討論の場を設けてきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、平成 16 年度は国際文化財保存修復協力センターが担当した。

位置情報をもった事物を対象としてデータベース化・管理・分析を行うツールである地理情報システム (GIS) は、近年さまざまな分野での利用が進んでいる。文化財は位置情報との関係が不可分であるが、日本では埋蔵文化財以外の分野での GIS の利用はまだ始まったばかりといえる。そこで、本研究協議会では現在 GIS を積極的に活用している文化財分野の専門家による事例紹介を行い、今後の GIS の利用の可能性について検討を行った。

### 概 要

テーマ：文化財の調査研究および保護に対する地理情報システムの利用

日 時：2005 (平成 17 年) 年 3 月 24 日 (木) 10:20~18:00

会 場：東京文化財研究所セミナー室 参加者：67 名

#### プログラム

基調講演：文化財保存修復分野における GIS の利用	碓井照子 (奈良大学)
文化財と時空間情報科学ー 4D-GIS による文化財解析ー	津村宏臣 (東京芸術大学)
文化財防災への GIS の利用	二神葉子 (東京文化財研究所)
金沢の GIS 歴史遺産データベースについて	宮下智裕 (金沢工業大学)
GIS を用いた文化財インヴェントリー	
ロズリーヌ・ビュシエール (イル・ド・フランス地方圏文化局)	
世界遺産のマネージメントプランと保護に応用された情報システム	
マリオ・サンタナ・キンテロ (世界遺産センター)	

## 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①修 01-04-4/5 の一部として実施)

平成 16 年度は、大型建造物の保存修復と活用に関する研究会を行った。今年度は、計 2 回の研究会を開催し、我が国における現状および問題点の報告、ドイツ・スイスにおける同種の問題点やその解決方法に関する報告を受け、討議を行った。

### ◇第 15 回 「大型建造物の保存修復と活用」

日 時：2004 (平成 16) 年 10 月 4 日 (月)

会 場：東京文化財研究所セミナー室 9:00~12:30

講演者：森井 順之 (東京文化財研究所) 「碓氷峠鉄道施設の保存修復」  
伊東 孝 (日本大学) 「近代土木遺産の保存と利活用」  
原 剛 (防衛研究所) 「要塞砲台の建設と残存状況」  
西澤 泰彦 (名古屋大学) 「近代化遺産としてのドライドック」

### ◇第 16 回 「鉄道周辺施設の保存修復と活用～ヨーロッパにおける事例」

日 時：2004 (平成 16) 年 11 月 17 日 (水)

会 場：東京文化財研究所セミナー室 9:30~17:00

講演者：川野邊 渉（東京文化財研究所）

「文化財としての大型建造物の保存修復について」

アルフレッド・ゴットヴァルト（ドイツ技術博物館）

「史跡保護に関するオペレーション—1882年のベルリン都市鉄道システムとその改変、および125年を通じた鉄道オペレーションの保護」

ノルベルト・テンペル（ドイツ・ヴェストファーレン産業博物館）

「ヴィンテージ期の土木建造物—修復と維持管理の課題」

ハンス・ピーター・ベルチ（スイス・ARIAS 産業文化）

「大型産業遺産の保存」

ロルフ・ホーマン（ドイツ・産業考古学事務所）

「ドイツにおける土木遺産の三つの指標—保存・修復・再利用」

### 在外日本古美術品保存修復技術研究会（②修 05-04-4/5 の一部として実施）

東京文化財研究所では、在外日本古美術品保存修復協力事業を行っている。これは、海外で保管されている絵画や工芸品など日本美術品を対象に保存修復を行う協力事業である。対象となる美術作品は、海外の乾燥した気象条件のもとで保存されていたために、日本国内のものと比較して劣化・破損が目立つものが多い。そのために、従来の保存修復技術では十分な修復ができないケースもあり、修復に際して様々な実験や物性の調査を行う必要がある。

平成16年度は、下記の通り研究会を開催し、「耕作図蒔絵料紙箱」（ロサンジェルス・カウンティ美術館蔵）と「和歌浦蒔絵香箱」（ピーボディ・エセックス博物館蔵）に関する意見交換及び田中久重作「万年時計」（株式会社東芝蔵）との製作技法の検討を行った。

日時：2004（平成16）年6月21日（月）

会場：東京文化財研究所修復技術部第2アトリエ

概要：

「耕作図蒔絵料紙箱」は、ロサンジェルス・カウンティ美術館が保管する17世紀後半の蒔絵作品で、17世紀初頭に描かれた「四季耕作図屏風」（伝狩野山雪筆、ミネアポリス美術館蔵）に代表される漢画のテーマをもとにしている。耕作図を蒔絵した作品には、「田植蒔絵硯箱」（永青文庫蔵）や「田植蒔絵鏡筒」（個人蔵）など日本各地の美術館・博物館に所蔵されている。また、「和歌浦蒔絵香箱」は、名所蒔絵として18世紀初頭に製作され、香合や香炉などの内容品が揃って保管されている貴重な作品でもある。日本三景や名所図絵が描かれた17世紀の後半から、あまり時間を隔てずに製作されたものと考えられる。本研究会では、これら2点の修復作品の製作技法並びに修復材料・技法について意見交換を行い保存修復への参考とした。

また、「万年時計」（株式会社東芝所蔵）は、同社の創始者である田中久重が1851（嘉永4）年に製作したからくり時計である。楼閣を思わせる六角形の文字盤部分と基壇からなっている。外装は漆塗りに螺鈿・蒔絵などで幾何学文様を表し、六角形の基壇の周囲に草花野鳥などを泥七宝で表した装飾性に富んだ作品といえる。内部のからくりは、違った時刻を刻む6面の文字盤を、ひとつのゼンマイで動かす仕掛けになっている。田中久重が海外への輸出を目指して製作したと伝えられるこの時計の製作当初の姿が、どのようなものであったかについては詳しくないが、明治十年代の修理にあたって現状の時計に改装したことが記録から窺える。一説には、一度ゼンマイを巻き上げると200日連続して動いたと言われている。この時計は、2005（平成17）年3月から開催される「2005年日本国際博覧会」にレプリカを作り展示する計画があり、その機会を捉え、幕末の工芸技術がどのようなものであったか、前述した2点の蒔絵作品との比較検討を行った。

#### ④研究集会・講座等

#### 総合研究会 (④情)

所内で開催する総合研究会は、協力調整官—情報調整室が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成16年度は、以下のスケジュールで実施した(会場:東京文化財研究所セミナー室)。

第1回 平成16(2004)年9月7日(火)

発表者:朽津 信明(国際文化財保存修復協力センター)「国際交流と装飾古墳」

第2回 平成16(2004)年10月5日(火)

発表者:石崎 武志(保存科学部)、川野邊 渉(修復技術部)「キトラ古墳壁画について」

第3回 平成16(2004)年11月2日(火)

発表者:鎌倉 恵子(芸能部)「人形浄瑠璃 近現代の変遷をめぐって 詞章と首<sup>かしら</sup>—「勸進帳」を中心に—」

飯島 満(芸能部)「東京文化財研究所芸能部所蔵SP 二世豊竹古鞠太夫(山城少掾)の音声資料に見る昭和館所蔵SPとの比較」

第4回 平成16(2004)年12月7日(火)

発表者:津田 徹英(美術部)「移動する仏像—兵庫・法恩寺菩薩坐像(中国・南宋時代)をめぐる二、三の知見—」

第5回 平成17(2005)年2月1日(火)『紅白梅図(尾形光琳筆、MOA美術館所蔵)調査について』

発表者:三浦 定俊(協力調整官)「調査経緯およびX線画像について」

山梨絵美子(情報調整室)「紅白梅図についての文献史(色彩や技法についてどのようなことが云われてきたか)」

城野 誠治(情報調整室)「調査で得られた画像について」

早川 泰弘(保存科学部)「蛍光X線分析結果について」

#### 美術部研究会 (④美)

美術部では、8月を除く毎月1回、美術史を専門とし、あるいは関心をもつ所内外の研究者による研究会を開催し、個々人の研究や各プロジェクトの成果を発表し、評価を問う場としている。平成16年度は以下のような研究会が行われた。

4月28日 津田徹英(美術部)「日本の中世彫刻で用いられる『宋風』という言説をめぐるいくつかの問題について」

5月26日 鈴木廣之(美術部)「明治期府県博覧会について」

6月29日 塩谷 純(美術部)「再興日本美術院のひとびと—あるいは大正期の大観—」

李 仲熙(韓国・啓明大学校)

「朝鮮美展の東洋画部における画風変化—韓国の近代画風の成立について—」

7月28日 田中 淳(美術部)「モノの価格とコレクションの形成—黒田清輝と住友家—」

9月22日 中野照男(美術部)「ラワク遺跡について」

11月24日 田中 淳(美術部)「『海の幸』誕生」

植野健造(石橋財団石橋美術館)「名作物語—青木繁《海の幸》の100年—」

石井 亨(石橋財団)「《海の幸》再考—ものとしての絵画—」

- 12月22日 勝木言一郎(美術部)「敦煌壁画に見る観経变相未生怨図の図像について」
- 1月26日 崔 聖銀(韓国・徳成女子大学校)「高麗初期の石造菩薩像について」  
 コメンテーター：朴亨國(武蔵野美術大学)  
 司会：津田徹英(美術部)
- 2月9日 綿田 稔(情報調整室)「伝明兆筆雲谷等益補作『二十八祖像』(崇福寺蔵)について」
- 3月16日 佐藤道信(東京藝術大学)「日本の外国文化理解—人よりモノ、外交より貿易中心の—」  
 クリスティン・グース(米国・スタンフォード大学客員研究員)  
 "The Loaded Language of Cross-Cultural Evaluation" (文化間評価の偏りあることば)  
 司会：鈴木廣之(美術部)
- 3月30日 小林純子(沖縄県立芸術大学)「来沖画家の作品について—描かれた紅型を中心に—」

### 保存科学部研究会 (④保)

- (1) 2004(平成16)年6月11日(金) 高松塚古墳壁画の顔料分析に関する研究報告会  
 会場：奈良大学A棟4階 大会議室  
 参加者：145名  
 調査の概要について 三浦 定俊(協力調整官)  
 蛍光X線分析による無機顔料の分析 早川 泰弘(保存科学部)  
 可視光励起蛍光による顔料の推定 城野 誠治(情報調整室)、佐野 千絵(保存科学部)
- (2) 2004(平成16)年6月21日(月) 平成16年度第1回臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会  
 「臭化メチルの2004年末全廃と博物館美術館等のカビ対策」  
 会場：東京文化財研究所セミナー室  
 参加者：65名  
 2004年末臭化メチル全廃を前に 山野 勝次(文化財虫害研究所、兼保存科学部)  
 ビデオ「文化財生物被害防止ガイド」について 佐野 千絵(保存科学部)  
 博物館美術館等におけるカビのコントロールについて 木川 りか(保存科学部)  
 カビモニタリングの動向と今後の方向性 佐野 千絵(保存科学部)  
 三康図書館におけるカビの対策 —経過と現状— 志多伯峰子(三康図書館)
- (3) 2004(平成16)年9月27日(月)  
 「石造文化財や歴史的レンガ建造物の劣化機構と保存対策」  
 会場：ドレスデン工科大学建築学科会議室  
 参加者：10名  
 東南アジアの石造文化財、歴史的レンガ建造物の劣化機構 石崎 武志(保存科学部)  
 北海道のような寒冷気候下にある歴史的建造物の土壁の劣化機構  
 高見 雅三(北海道立地質研究所)、石崎 武志(保存科学部)  
 多孔質体の吸放湿性能に関するエンジニアリングモデルの評価  
 ジョージ・シェフラー、ジョン・グルネワルド、ピーター・ハウプル(ドレスデン工科大学)

④研究集会・講座等

(4) 2004 (平成 16) 年 10 月 6 日 (水) 平成 16 年度第 2 回臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会

「文化財の生物被害—微生物と害虫対策の両面から—」

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：74 名

美術品の微生物被害とその特徴について

オリオ・チフェリ (バヴィア大学名誉教授)

博物館美術館等における IPM (総合的有害生物管理) の適用—世界の事例にみる考え方と具体的方法論

トム・ストラング (カナダ保存研究所)

(5) 2004 (平成 16) 年 11 月 11 日 (木) 文化財の保存 (収蔵展示) 環境の研究

「文化財施設内の温湿度環境と建物の構造」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：56 名

文化財施設内の温湿度環境と建物の構造

石崎 武志、犬塚 将英 (保存科学部)

通気層を有する二重屋根の遮熱特性に関する検討

白石 靖幸 (北九州市立大学)

復元竪穴住居の内部環境と保全対策

宮野 秋彦 (名古屋工業大学名誉教授)

歴史建造物における文化財の保存展示空間の再開発

神庭 信幸 (東京国立博物館)

水害を受けたドイツドレスデン市の歴史的建造物壁体の乾燥について

ジョン・グルネワルド (ドレスデン工科大学)

(6) 2004 (平成 16) 年 11 月 12 日 (金)

「建築材料の水分特性、調湿特性の研究」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：14 名

建築材料の湿度特性のエンジニアリングモデルに関する評価

ジョン・グルネワルド (ドレスデン工科大学)

建築材料の吸湿特性の試験および解析手法

ルドルフ・プラーゲ (ドレスデン工科大学)

調湿建材の吸放湿性能試験方法と吸放湿性能評価に関する ISO 国際規格について

宮野 秋彦 (名古屋工業大学名誉教授)

建造物内部の湿度安定性と建築材料の調湿特性について (山車収蔵庫の事例)

石崎 武志 (保存科学部)、高見 雅三 (北海道地質研究所)

ジョン・グルネワルド (ドレスデン工科大学)

壁体の吸放湿性を考慮した冷房使用時の室内環境解析

宇野 朋子 (京都大学大学院)

水害にあったドレスデン市の歴史的建造物の水分特性測定

ルドルフ・プラーゲ (ドレスデン工科大学)

(7) 2005 (平成 17) 年 1 月 20 日 (木) 平成 16 年度第 3 回臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会

「環境微生物—その特性と制御」

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：76 名

菌類の特性と分類—カビを中心に

杉山 純多 (東京大学名誉教授)

環境制御によるカビ発育のコントロール

阿部 恵子 (環境生物学研究所)

環境微生物—その生態と発生防止

高鳥 浩介 (国立医薬品食品衛生研究所)

## 各国の文化財保護制度に関する研究会（④セ）

国際文化財保存修復協力センターでは、わが国の文化財保護制度拡充のための政策的研究に資するため、またわが国が文化財保護を通して行う国際協力の効果的な遂行に資するため、世界各国の文化財保護制度に関する調査研究を進めている。本研究会は定期的なものではないが、研究所の事業その他の目的で来日された各国の専門家、また国内の専門家をお願いして、文化財保護制度についての情報交換を行うことを目的に開催している。

### 第9回各国の文化財保護制度に関する研究会

歴史的モニュメント主任建築家とは、選抜試験により全国で50人ほどに限定されたフランスの歴史的モニュメントの修復建築家に与えられた資格で、重要な修復工事はこの資格をもつ建築家のみが担当できる。本研究会では、歴史的モニュメント主任建築家であるルフェーヴル氏の講演が行われた。

日 時：2004（平成16）年5月31日（月） 15:00～17:30

会 場：東京文化財研究所会議室

講 演：「歴史的モニュメント主任建築家の職能と実践」

ダニエル・ルフェーヴル（歴史的モニュメント主任建築家）

### 第10回各国の文化財保護制度に関する研究会

フランスには、国定の歴史的モニュメントの保護を確実にするため、歴史的モニュメント監視建築家(ABF)という公務員建築家の職能がある。本研究会では、文化・コミュニケーション省所属の2名の専門家に、ABFのほとんどが卒業している官立予備門ともいべきシャイヨー高等研究センターに関する講演と、文化・コミュニケーション省から派遣され地方で活動する公務員建築家ABFの実務に関する講演をいただいた。

テーマ：フランス文化財保護の現在（3）：文化財建築家の養成と実務

日 時：2004（平成16）年7月20日（火） 14:00～17:30

会 場：東京文化財研究所会議室

講 演：「シャイヨー高等研究センターに於ける文化財修復建築家の養成」

アラン・マリノス（フランス文化コミュニケーション省建築・文化財局地方分散機関統括官）

「歴史的モニュメント監視建築家の実務」

ジャン＝ミッシェル・ペリニオン（ジロンド県建築・文化財課長）

### 第11回各国の文化財保護制度に関する研究会

世界的にも有数の文化財を有するイタリアでは、統一以前から国内の文化財を保護する法制度が整えられてきた。文化財を管轄する省には、領土内の文化財を網羅的に管轄する出先機関「文化財監督局（ソプリンテンデンツァ）」が各地に置かれており、イタリアの文化財保護制度を理解する上で欠かせない重要な役割を果たしている。このイタリア独自の文化財監督局の仕組みについて、そして展覧会すなわち文化財の公開に関わる規定とその実務について、主に動産文化財に焦点を当てて研究会を開催した。

テーマ：イタリア文化財保護の仕組み：文化財監督局の役割と展覧会に関する規定

日 時：2005（平成17）年1月31日（月）

会 場：東京文化財研究所会議室

講 演：「文化財監督局：フィレンツェ美術館特別監督局とインヴェントリー及びカタログ」

マリア・スフラメーリ（フィレンツェ美術館特別監督局）

「展覧会に関わる規定と実務」

ロベルト・ボッディ（フィレンツェ貴石加工所及び修復研究所）